

『教育創造』一九五一年七月（上越・高田教育研究会）

教材提出の近代的方式

矢口 新

一

教材という言葉には、古い伝統があるために、何か古い学習観のからがつきまといっているようである。併し本来は人間の形成のための媒介となるものの謂れであつて、何れも古い学習と必然的な結びつきをもっているわけではない。如何なる学習にもせよ、媒介となるものなくしては成立たないのであるから、これは教育の現場の人にとっては重要な関心事でなければならぬ。教師が如何なる教材を提出するかによつて学習の目標が到達されるかどうかも限定されるのである。

所が新しい教育に於ける教材のあり方に関して本当に具体的に考えている人が少いように思われる。或る人々は教材という観念を、旧教育で用いたように教科書方式によつて提出した概念教材という様に頭から規定して、従つてそういうものは新しい教育には重要でないなどと考へているかの如くである。若しそうだとしたら大変な間違いであろう。

或はまた別の人々は教材という問題については無関心であつて漠然と昔からの伝統的な観念に従つていただけである。それでいて新しい学習の方式を盛に論じ実践する積りになつてゐる。併しそれでは学習の具体的な場面で、真に新しい教育の理念を実現することは不可能でありまた事実新しい学習になつてゐない。

総じてこのようなことは、新しい教育についての突込み方が形式的

であり観念的である所から起つて来ているのである。われわれは一度学習の実体に即して新しい教育の反省をしてみる必要があるのである。

もちろん戦後の新しい教育理論で教材の問題にふれていないのではない。例えば教材は現実そのものからとり出されなければならぬ等といわれている。それは一般理論としては何人も極めて尤もなことで納得するのである。併しそれだけでは実は教育現場の問題としては具体的な理論とならないのである。現場の教育者にとっては、そういう理論は抽象的観念として頭の中にあるというに過ぎない。そして現実の教育場面、学習場面では古くからあり半ば常識として身につけている教材観念が力をもつていて、実際に新学習方式にそぐわない、いわば空虚な教材を児童に対して提出しているのである。こういうこと即ち理論が現実まで浸透していないで頭の中だけにあることをわれわれは観念的なことだといふのである。

われわれは実際に学習の現場にどのような教材を提出するかを、もつと具体的に、即ち具体的な単元のどの問題にどういう目標を達成するためにどういう教材をどう提出するかという風に考へて、そして一般的理論として考へていることの意義を深く掘り下げてみる必要がある。そういう具体的な所で理論を展開しないでいつまでも一般論で終つてゐる限り現実には進展しないであろう。そして恐らく具体的な実践に即して問題を考へると、教材提出の問題についても様々に異つた新しい展望が開けて来るであろう。

以下ここで社会科についての教材問題を具体的に考へてみる。もちろん社会科だけのことではないが、ただ限られた紙数で具体的に考へるための便宜上である。

例えば新聞の学習が社会科で行われる。新しい教育が社会科で新聞の社会的な機能を見事に考へさせようとする意図については何人も納得しているであろう。新聞は現代社会に於て恰も人間に於ける神経

系統としての重要な役割を果して居る。従つてその機能を益々合理的に發揮するように育てることは、一新聞人だけでなく、現代社会に住むすべての人々の問題となつて居る。我々が新聞についてどう認識し、どう行動するかによつて新聞のあり方も異つて来るという意味で、新聞はもはやわれわれのものになつて居る。即ち社会の公器といわれる所以である。だからそれをどう育てるかを見守るに考えさせることは大切なことであらう。

さてその場合に児童が考えて新聞の働きを把握するためには考える材料がなくてはならぬ。即ち新聞が社会に於て現在働いている姿が児童に提供され、児童はそれについて考えるのである。これが教材であらう。

所でかりに旧教育式の教材として考えてみると恐らく「新聞はこういう働きをしているものである云々」ということが言葉で書かれたものが教材と考えられるであらう。児童はそれを讀んでおぼえるということになる。新しい考え方はそうではない。「新聞はこれこれの働きをしている」ということは、現実生活の中で新聞が働いているのを見て児童自らが自覚することなのである。そしてその結果としては児童がこれをおぼえるということになるかも知れない。こう考えると一寸見では旧教育の方が手取り早いといえそうである。新教育は廻りくどい。

けれども実は新しい教育は「新聞はこれこれである」といった命題を記憶することはもちろん、そのような知識をただ結果としてもつとということを目標としていないのである。むしろ現実の中で働いている姿をみて、それを整理して自分で体系的にまとめるといふ考え方乃至見方を養うことに目標を置いて居るのである。従つて現実を見て整理するという学習活動の過程が大切で結果は二の次と考えて居るのである。

それは新聞を育てることの出来る人間をつくらうという極めて実

践的な目標を新教育がもつて居るからである。何故なら新聞を育てるといふ見地から言えば、人々は生活の様々な場面で様々な新聞のはたらきにぶつかつて居るであらうが、その時にその具体の場面で事態を見極めて行動することが必要なのである。現実には常に真実と虚偽との両者が混在しているといわれるが、それは新聞の働きについても同様であらう。「新聞はこれこれの働きをしている」といふ概念だけでは一つの面を表現して居るであらうが、現実には必ずしもそうではなく「これこれの働きをしていない」場合も多いのである。我々が現実の中で新聞を育てるといふ理念をもつて行動する場合は、この真実と虚偽とを見分けることが第一に重要であつて、それによつて我々の正しい行動も営まれるのである。そのためには現実をみて見分けることが大切である。いわば見て判断する修練をしてゆく学習に真に実践的な人間に必要な理解力も養われて行くのである。

こうなつてくると児童に提出される教材は旧教育に於いてのごとく、社会を見た結果の概念である所の「新聞はこう働いている」といふ如きものでは教材としての役割、即ち児童を見ることが出来る人間として育てる媒介としての役割を果さないということになつて来る。新聞についての観念をもつ人間は出来るかも知れないが、現在われわれの考へている実践的人間を育てる媒介とはならないといわねばならぬ。

そこでわれわれが考える教育のためには、如何なる方式によつて教材を提出するべきかが考えられて来なければならぬのである。即ちかくの如き意味に於て新しい教育では教材が概念を羅列したものでなく、現実的なものでなければならぬといわれるとすれば、それはそもそも如何なる方式によるべきであらうか。

二

さて教材が概念的なものから抜け出して、現実的なものにならねば

ならぬといつても、それは現実そのままであらねばならぬということではない。学習に必要なのは教材であつて、あくまで教育に使用して、児童がそれに働きかけて自ら整理し、これを体系的に処理して確実に概念として把握して行く対象なのである。だから眞実はこれであり、虚偽はこれであるということが明らかに把握出来るようなものであることが教育的に要求されるのである。児童のふれる、現実そのものがそういうものになつて居ればもちろん現実そのものが教材として使われてよいけれども必ずしも現実はそのでない。そこに教材として最も具体的な構成と提出の問題があるのである。

もちろん現実そのものを見分けるようになることが人間教育の理想であるが、児童にいきなり複雑な現実を見分けさせることは不可能なのである。そこにまず第一に児童の心理的段階に即した教材を構成してやるという見地が生まれて来る。そういう教材を積み重ねて次第に現実そのものを見ることが出来るようになることが教育課程というものである。

更にまた、現実そのものは児童のみでなく大人にとつても決して単純な方式で見ることが出来るのではないのである。もちろん肉眼で見ると等ということの出来るものでない。眞実と虚偽とを現実の中でふるいわけるといふことは、たとえ大人にとつても、過去から現在にわたる一切の経験を動員して且つ推理、洞察を交えて充分考えたいえでなされることである。その過去の経験は、長い時間にわたつて得られたものであり、また広く様々な現実と接して培われたものである。

児童に若しいきなり現実の社会で新聞の働きを考えさせるとするならば、それは非常に長い時間と大きな努力を必要とする。そうしてそれに関する経験をさせなければならぬのである。新聞の社会に於ける働きは決して眼に見える所ではなされてない。新聞社の中でももちろん、一時間や二時間或は一日や二日、みた位では到底つかまれないのである。新聞社は通り一ぺんに見ては、建物と人と機械の動

きが散漫に目にうつるだけである。新聞の働きというのは、そういう所にはなく、新聞社から各地へ出されてる記者の頭の中の働きであり、それが記事となつて配付された時に読む人々の心の中にあるといわなければならぬ。凡そ社会の現実というものはすべてこのようにひろい空間的・時間的構造をもっている。それらを見ることによつてわれわれは眞に現実を見ているといえるのである。大人はそういうものを長い生活の経験から多少は見ているのである。それが問題に直面した時総合的に働くのである。併し大人でも本当に現実を見ることは、なかなかむつかしいのであつて、多くの場合そのために特別の努力をしなければならぬのである。このことは直接経験だけによつては現代の社会は見ることは出来ないということだといつてよい。

このように考えて来ると新しい社会科の教育に於て教材を現実的なものからとるなどといつても観念的には尤もであろうが實際的にむつかしいことであることが明らかだと思ふ。その通り一ぺんの理論で、それから先の具体的なことはすべて現場の教育者に一任してあるなどということは日本の教育理論にとつては恥辱以外のなものでもない。教育の現場の問題はその通り一ぺんの理論を前提としてそれから先にあるのであつて、実は理論もその具体的な所で展開されなければ理論とは言えないであらう。

教育の現場の人達の関心がこういう具体的な問題にふれて来ないで、形式的な単元学習論や導入・展開の論を繰返して有頂天になっている所をみると、如何にも敗戦国のみじめさと翻訳教育の貧困さとを感ずるのである。

さて問題が横道へそれたが、新しい教育にとつて新しく教材提出を考えなければ、即ち児童に考えるための材料を与えないで考えさせようとしている限り、それは混乱とナンセンスを生むだけであらう。そして新しい教材とはただ現実的などといっただけでは少しも具体的にならないことも明らかとなつたであらう。

そこに当然考えられるのが、視覚教材といわれている映画教材なのである。即ち教材の提出を映画によって行うという考え方なのである。もちろん教材の性格を現実化する営みは従来からあった。教科書による教材についても考えられなければならないし、事実今年度から使用されるようになった社会科の教科書などでは、そこに盛り込まれた教材は著しくリアルなものに変わりつつあることは認めてよい。併しそれは本質的に言う、教科書が次第に映画的な表現の世界へ近づいて行っているという点で、そういう点からいうと教科書はもはや映画の次に位するものである。従って教科書に関するそういう努力には限界があるのである。

われわれが児童に何を把握させるかということに明瞭に意識して、そのために提出さるべき現実的な教材がどういう内容のものでなければならぬかということを真剣に考えたならば、映画による教材提出ということが必要かくべからざるものとして考えられて来るであろう。再び新聞の学習にもどって考えるならば、真に新聞の働きを子供自身に自分で把握させるという学習をさせようとするならば、即ち現実的なものをみて把握するという学習の活動自体に重要な意味をおいて考えるという新教育の立場に立つならば、新聞社が社会の各方面に様々な記者を派遣してニュースを集めて来て、それを一般の人々に配付し、そのことにより一般の人々が様々な意見をもち、また具体的な行動をするといった一連の構造的な現実、その中に於ける真実と虚偽とを児童に見せようと必然的に考えざるを得ないであろう。そして同時に従来しばしば行われた新聞社の見学などということは極めて末梢的な教材を提出しているに過ぎないということも気付くであろう。

その他新聞の学習に行われた多くの学習活動が大体それに類した所のお茶をにごしている程度のものであることも疑う余地はない。こう考へて来ると新聞学習に必要な教材、即ち新聞の社会的な機能、広い社会の全面に浸透している働き、長い時間的経過をとって現われて

くる働きをあらわすような教材は映画形成に於て最も適切に提出されるということである。

視覚教材とは、このように考えられて現在新しい教育に登場して来るのである。即ち前述の如く新しい教材として要求される二つの点、一には現代生活の複雑な構造を見て考えることが出来るよう構成され得ること、第二には心理的段階を考慮して構成され得ること、この二つの条件を満すものとしての映画を使うということなのである。即ち教材は視覚的に、特に映画形式によって提出されなければ新しい教育は十全のものとはならないということなのである。そしてそれは言うまでもなく社会科ばかりの問題でない。理科に於ても、職業科に於ても凡そ内容教科と考えられるものについては同様に言われ得ることなのである。この場合、幻燈その他によって提出される教材は映画のもつ機能を何程か欠如したものと考へてよいであろう。そして欠如せるが故に教材として特に役割を果すということもあるのであるが、その点について今はふれない。

さてこれから先にもっと具体的な問題がある。そういう教材提出のためには学校管理の新しい方式を考え教材製作の社会的組織を確立するという問題がある。それらは既に新潟県に於て着々実践の緒につきつつある所であるからそれについては今はふれない。ただこれらが今後発展して新しい教材管理の方式が確立し、学校の経営がその様相を改め、学習の方式が一変し、それに応じて社会一般の例に於ても、教育方式に対する認識が根本的に変化して来た時に、はじめて真に新教育が現実として建設されたというべきであるということに注意しておきたい。現在の如く主として学校の内部での学習指導の技巧的な変化にとどまっている間は、まだ新教育というに値しない。かくして視覚方式による教材提出の成立ということは、新教育建設の中核に位置するものであろう。

(国立教育研究所・所員)